

国立公文書館内閣文庫所蔵の脈書

『紫虚崔真人脈訣秘旨』について

吉岡 広記

日本鍼灸研究会

訂正抄録

1. 『紫虚崔真人脈訣秘旨』の書誌

1巻1冊(303函74号、宋・崔嘉彦撰、多紀元簡手跋本、寛政3写、附5巻)。日本四つ目鍼眼原装、紙高267耗、紙幅180耗。外題は、題簽がなく、直接表紙に「紫虚崔真人脈訣秘旨 全」と墨書。扉に多紀元簡の識語が「此書、旧雜于官庫幼幼新書中。辛亥[1791]夏抄而得之。別装以改題簽云。丹波元簡識」と墨書される。序および目録なし。蔵印記「医学/函書」「躋寿殿/書籍記」「多紀氏/蔵書印」「日本/政府/函書」の4種。本文は、無界、每半葉10行、行17字。注文は、細字双行にて行34字。本書が9葉表まであり、続けて5書目が抄写される。『玄白子西原正派脈訣』が10葉表から20葉表まで、『玄白子相類脈訣』が20葉裏から24葉表まで、『玄白子診脈八段錦』が24葉裏から31葉表まで、『脈法微旨』が31葉裏から48葉表まで、『斲三点脈法撮要』が48葉裏から61葉表までの都合61葉。巻末(62葉表)に元堅の読書記が「執徐元默復月二十六日、読于存誠藥室」と朱書される。本書が、『医籍考』巻十八の『崔氏(嘉彦)脈訣』に記された元胤の按語「按此書、『東垣十書』、『医統正脈』中所收、其歌括耳、若全文、世從不知之。秘府所蔵明鈔『幼幼新書』、附録脈書五種、首編則崔氏原書、題曰「紫虚真人脈訣秘旨」、今記題詞于此、以訂正焉。」が指す『崔氏脈訣』の原書である。

2. 原書『脈訣秘旨』の構成と内容

本書の構成は、総論(仮称)、四摠脈、上焦寸口脈、中焦関上脈、下焦尺中脈、五蔵見浮脈主病、五蔵見沈脈主病、五蔵見遲脈主病、五蔵見数脈主病、七表八裏摠歸之脈、六極脈又若六絶、五蔵六府所出、七表八裏図の13項目からなる。総論で王叔和の七表八裏脈は「文理甚繁」であるが、「其枢要、但以浮沈遲数為宗」と述べ、四脈により「風氣冷熱」を弁別し、更に寸関尺三部にて上中下焦を、更に左右六部にて五蔵六府を診るのだと言う。本論は、それに沿って展開される。注目すべきは、七表八裏脈を言うも、併さるべき九道脈にはなんら触れない点である(通行本には見え、著者の異なることを示す)。筆者は、種々の点から九道脈の成立は北宋代と考えているが、成立後も崔嘉彦をはじめ諸家はその取扱に苦慮していることも、七表八裏脈に遅れて作られたことを示唆するものである。七表八裏九道脈は、崔嘉彦の生きた南宋代を境に定着していき、以降大いに盛行することになる。

3. 通行本『崔氏脈訣』と原書の関係

通行本は、元胤が述べるように、ことごとく歌訣のみであるが、逆に原書は歌訣を載せない。奇妙にも、原書に続けて附された元・張道中『玄白子正派脈訣』中の文字通り歌訣という項に同文があり、これに先だつ崔嘉彦の弟子の劉開が『方脈拳要』(現在、北京図書館に延祐4年[1318]の序文が付された明嘉靖33年[1554]黄魯曾刊本が所蔵されるのみで、明・劉純『医経小学』脈訣第二・方脈拳要に拠った)にも同文が確認される。ただし、『方脈拳要』は劉開に仮託された書(『日本現存中国稀観古医籍叢書』65頁、人民衛生出版社)で、通行本が金・李杲の手を経たということも同様であろうから、歌訣(通行本の原型)は張道中の作とするのが穏当である。彼の序「大徳辛丑[1301]既從鍊師得崔・劉四脈、玄又乃括其意、為之図並歌括」から、崔嘉彦の学統が劉開・朱宗陽(鍊師)本人へと継承されてきたことが知れる。劉開『脈訣理玄秘要』では九道脈が言及されるも原書の影響が色濃く反映されるのみで、張道中に至って脈図や歌訣が新作されたのである。原書は、陶宗儀『輟耕録』に「宋淳熙中南康崔紫虚隱君嘉彦、以『難経』於六難專言浮沈、九難專言遲数、故用為宗。以統七表八裏、而總万病」とあるから、明初までは認識されていたようである。宋以来の目録には見えず、焦竑『国史経籍志』に初めて載る間に、通行本に取って代わられたのである。

国立公文書館内閣文庫所蔵の脈書

『紫虚崔真人脈訣秘旨』について

吉岡 広記

日本鍼灸研究会

原抄録 (訂正箇所は青字にて明記)

1. 『紫虚崔真人脈訣秘旨』の書誌

1巻1冊 (303函74号、宋・崔嘉彦撰、多紀元簡手跋本、寛政3写、附5巻)。日本四つ目鍼眼原装、紙高267耗、紙幅180耗。外題は、題簽がなく、直接表紙に「紫虚崔真人脈訣秘旨 全」と墨書。扉に多紀元簡の識語が「此書、旧雜于官庫幼幼新書中。辛亥 [1791] 夏抄而得之。別装以改題簽云。丹波元簡識」と墨書される。序および目録なし。蔵印記「医学 / 図書」「躋寿殿 / 書籍記」「多紀氏 / 蔵書印」「日本 / 政府 / 図書」の4種。本文は、無界、每半葉10行、行17字。注文は、細字双行にて行34字。本書が9葉表まであり、続けて5書目が抄写される。『玄白子西原正派脈訣』が10葉表から20葉表まで、『玄白子相類脈訣』が20葉裏から24葉表まで、『玄白子診脈八段錦』が25葉裏から32葉表まで、『脈法微旨』が32葉裏から35葉から50葉表まで、『岐三点脈法撮要』が50葉裏から64葉表までの都合64葉。巻末 (64葉表) に元堅の読書記が「執徐元默復月二十六日、読于存誠藥室」と朱書される。本書が、『医籍考』巻十八の『崔氏 (嘉彦) 脈訣』に記された元胤の按語「按此書、『東垣十書』、『医統正脈』中所收、其歌括耳、若全文、世從不知之。秘府所蔵明鈔『幼幼新書』、附録脈書五種、首編則崔氏原書、題曰「紫虚真人脈訣秘旨」、今記題詞于此、以訂正焉。」が指す『崔氏脈訣』の原書である。

2. 原書『脈訣秘旨』の構成と内容

本書の構成は、総論 (仮称) 四摠脈、上焦寸口脈、中焦関上脈、下焦尺中脈、五蔵見浮脈主病、五蔵見沈脈主病、五蔵見遲脈主病、五蔵見数脈主病、七表八裏摠歸之脈、六極脈又若六絶、五蔵六府所出、七表八裏図の13項目からなる。総論で王叔和の七表八裏脈は「文理甚繁」であるが、「其枢要、但以浮沈遲数為宗」と述べ、四脈により「風氣冷熱」を弁別し、更に寸関尺三部にて上中下焦を、更に左右六部にて五蔵六府を診るのだと言う。本論は、それに沿って展開される。注目すべきは、七表八裏脈を言うも、併さるべき九道脈にはなんら触れない点である (通行本には見え、著者の異なることを示す)。筆者は、種々の点から九道脈の成立は北宋代と考えているが、成立後も崔嘉彦をはじめ諸家はその取扱に苦慮していることも、七表八裏脈に遅れて作られたことを示唆するものである。七表八裏九道脈は、崔嘉彦の生きた南宋代を堺に定着していき、以降大いに盛行することになる。

3. 通行本『崔氏脈訣』と原書の関係

通行本は、元胤が述べるように、ことごとく歌訣のみであるが、逆に原書は歌訣を載せない。奇妙にも、原書に続けて附された元・張道中『玄白子正派脈訣』中の文字通り歌訣という項に同文があり、これに先だつ崔嘉彦の弟子の劉開が『方脈拳要』 (現在、北京図書館に延祐4年 [1318] の序文が付された明嘉靖33年 [1554] 黄魯曾刊本が所蔵されるのみで、明・劉純『医經小学』脈訣第二・方脈拳要に拠った) にも同文が確認される。ただし、『方脈拳要』は劉開に仮託された書 (『日本現存中国稀観古医籍叢書』65頁、人民衛生出版社) で、通行本が金・李杲の手を経たということも同様であろうから、歌訣 (通行本の原型) は張道中の作とするのが穏当である。彼の序「大徳辛丑 [1301] 既從鍊師得崔・劉四脈、玄又乃括其意、為之図並歌括」から、崔嘉彦の学統が劉開 朱宗陽 (鍊師) 本人へと継承されてきたことが知れる。劉開『脈訣理玄秘要』では九道脈が言及されるも原書の影響が色濃く反映されるのみで、張道中に至って脈図や歌訣が新作されたのである。原書は、陶宗儀『輟耕録』に「宋淳熙中南康崔紫虚隠君嘉彦、以『難經』於六難專言浮沈、九難專言遲数、故用為宗。以統七表八裏、而總万病」とあるから、明初までは認識されていたようである。宋以来の目録には見えず、焦竑『国史経籍志』に初めて載る間に、通行本に取って代わられたのである。